

## お告げのマリア修道会


 まごころ会

2025年3月

Tel.095-846-8300

QRコードから  
アクセスして  
下さい

『わたしは主のはしたためです。』

『お言葉どおり、この身になりますように。』

## 四旬節が始まります

今年の灰の水曜日は3月5日です。40日間の回心の歩み、神様の慈しみ、ゆるしの恵みを味わう四旬節が始まります。

『そこ（秘跡による和解）において、主はわたしたちの罪を滅ぼし、わたしたちの心をいやし、わたしたちを起き上がらせて抱きしめ、その優しくいつくしみに満ちたみ顔を示してくださいさるのです。主によって和解させていただきます（ニコリント5・20参照）、そのゆるしを深く味わうことこそ、神を知るいちばんの方法です。告白を放棄せずに、いやしと喜びの秘跡のすばらしさ、罪のゆるしのすばらしさを再発見しましょう。』（「希望は欺かない」23番）

昨年の下五島巡礼に続いて、上五島の教会を歩いて巡ります。神様と語り、仲間と恵みを分かち合いながら、歩いてみませんか。お申し込みはQRコードからお願いします。



**イエスと歩く  
がち 徒歩巡礼 in 上五島**  
～エツファタ / 開け～

**日時：2025年4月27日(日)～29日(火)**

集合解散：青方教会（南松浦郡新上五島町青方町）  
巡礼地：曾根・赤波江・江袋・仲知・米山各教会  
野崎島（野首天主堂）※調整中

対象：高校生～40歳までのカトリックの  
独身男女（求道者可）

定員：10名  
参加費：8,000円  
申込×切：4月13日(日)

主催：お告げのマリア修道会 makinoko  
問合せ：vocation325@gmail.com

←詳細・お申込みはこちらから




「人の思いをはるかに超えて」梅木公子  
六 望まれる養成機関 〽つづき〽

黙想会の話が出たので、この頃の黙想会の様子を少し書きたい。統合して、黙想が義務付けられたが、当時黙想会は各修道院持ち回りだった。細々と肩を寄せ合って暮らしている狭い家に、一度にたくさんの方がやってくるので、その準備は大変だった。布団、鍋釜茶碗、皿、料理の仕出しなど、まるで結婚式のような騒動だった。でも、みんな初めて他の修道院に寝泊まりし、初めて修道者の身分のものだけで、講話を聴き、祈り、時には悩みなども言いあって、楽しい交わりの時でもあった。自分の修道院から一歩も出たことのない者も多かったので、初めての楽しい小旅行でもあった。黙想会を通じて互いを確認し合い、一つの修道家族としての絆を深めていった。

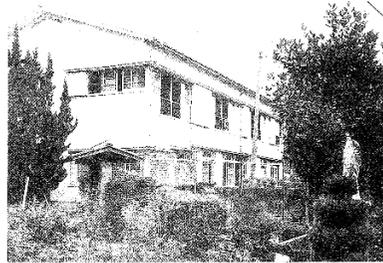
この頃、教会も大きく変わろうとしていた。ピオ12世の後、教皇の座に着かれたヨハネ23世は、第二バチカン公会議を開き、開かれた教会を目指した。多くの回勅、教令が出され、1964年ミサが対面、日本語になった。修道生活も個性が重んじられ、自己の責任が問われるようになった。松永師はいち早くこれらの動きを捉え、これをもとに指導に当たられた。「教会憲章」「修道生活の刷新適応に関する教令」が講話や修練院のテキストに用いられた、またこうした動きを踏まえた会憲、慣例書の草案も練られた。



まごころ会会員帰天、お祈りください

・マリア 平山 君子 三井楽教会

少しずつ修道会としての形を整え始めた聖婢姉妹会にとって養成は差し迫った問題だった。1965年、松永師は大浦の本部に当てられた建物に隣接して、志願院を建設し、「サンタマリアの家」と名付けた。それぞれの支部で養成されていた学生、志願者たちが皆ここで養成を受けることになった。この志願者たちのお世話係りに、水の浦修道院の赤窄イソが任命された。転任など思いもよらない時代、受諾は至難の業だった。考えあぐねた末、「お受けできません」と返事をポストに投入した。しかし、その後すぐに、これはふさわしくない行動だったと反省し、慌てて郵便局に出かけ投函したばかりの手紙を返却してもらった。司祭の呼びかけに抗することのできない素朴な従順がほほえましい。ここには多いときには50名から60名もの志願者たちが居住し、朝、電車の停留所に向かって大浦の坂を駆け下る姿は壮観だった。



大浦に建設された  
「サンタマリアの家」

## 七 実質的統合への歩み

支部が先で、本部が後という異例の成り立ちのため、本部を構成する、会長、顧問、修練長、本部要員を選び出し、本部に召喚するのは容易なことではなかった。松永師に要請されて、木ロマツ、宮地シメ子、岩崎キメが交替でその任に当たったが、支部と掛け持ちで双方を行き来した。しかし、このような困難な状況の中で、支部へ通達を出し、院長を集めて院長会を開くなど、一つの修道会として会

員をまとめること、目指すものを伝えるための努力が払われた。本部の建設、会計の一本化は、まず着手しなければならぬ課題だった。1967年から岩崎キメが会長となり、修道会、教会の全国的な研修会や会合に積極的に参加し、外部から司祭やシスターを招くなど、新しい息吹を吹き入れた。大阪聖ヨゼフ宣教修道女会、援助マリア会に修練を委託したりもした。聖婢姉妹会という修道会が長崎にあるらしいと、すこしずつ存在が知られるようになったが、会員たちはまだ、聖婢姉妹会会員であることが他人事のように、なにかしら面映ゆく感じていた。

1968年、山口大司教様が引退なさり、里脇司教様が着座された。



里脇枢機卿様

里脇大司教様は、先にも述べたように、聖婢姉妹会統合の調査に当たって下さった方であったから、この後特別のご配慮をいただくことになる。1970年頃から若手の会員が集められて、年に何回か明日の聖婢姉妹会の在り方を語り合った。この集まりで、「おたより」の発刊を決議し、1971年7月に第一号を発行した。発行所は福江修道院、月刊で、互いの情報交換が目的であったが、松永師、会長の寄稿もあって修道生活を考えるよすがともなった。



松永司教様

また、支部訪問を掲載し、毎月一か所ずつ支部を紹介した。

また、この頃、里脇大司教様の提案もあって、修道服用の賛否をめぐる論議が盛んになり、「おたより」の紙面もこのことで賑った。

